



佳作

書評 池波正太郎著：新装版『剣客商売』（新潮社 2002年）

（生田新書・文庫コーナー：新潮文庫 いー17ー1：剣客商売 1）

法学部4年 山田善之

Simple is the best. 推敲を重ねた文章と言うのは、得てしてシンプルになりやすい。無駄がそぎ落とされるために、柔道や空手等で言うところの「形」と同じようなものが出来上がる。例えば時代劇なら、勧善懲悪がその「形」となる。主人公が仲間たちと共に、義理と人情で悪事を裁く。シンプルだからこそ分かりやすく、面白い。しかしながら、その「形」こそ、最も難しいものでもある。なぜなら、話の展開が決まっているからこそ、その内容や登場人物の個性、背景描写がより重要となってくるからだ。

本書は幕府で老中の田沼意次が政権を握っていた時代、剣客の秋山小兵衛や息子の秋山大治郎らが、江戸を舞台に様々な事件に関与していく短編小説である。恥ずかしながら、私は時代小説を読んだことがなかった。そんな私が本書を楽しめたのは、話の毎に登場する料理の数々やおよそ時代小説らしからぬ登場人物の個性があるからである。

池波正太郎氏の作品には料理が欠かせない。これは、俳句に季語が必要なと同じようなものである。毎度出てくる様々な料理には、江戸という時代を感じさせる魅力がある。料理に使われる食材や調味料、調理方法までありとあらゆるものが、当時の食生活を連想させる。それは、ファーストフードに慣れた現代人に、和食のレパートリーの多さも再認識させてくれる。

また、個性的な登場人物も忘れてはならない。作品の主人公である秋山小兵衛は、本書に初登場の時点で59歳。その小兵衛に奉公している40歳以上年下のおはるは、小兵衛と男女の仲。そして、おはると同い年の女性剣客である佐々木三冬も秋山小兵衛に思いを募らせる。この三人の関係と、聖物な秋山大治郎がどのような変化をしていくか、シリーズを通して見てみたいと思わせてくれる。

短編小説というものには様々な制約が課される。常に詳細であることが正しいとは限らない。内容が分かりやすく、読みやすくなければならない。だからこそ、シンプルであることが望ましくなる。そのような文章は、行間から読者の想像を膨らませてくれる。本書の場合、料理から時代を感じ、その当時の食卓の匂いすらも想像することが可能となる。本当に必要な要素と想像させる要素のさじ加減こそ、著者の技量が試されるポイントである。その点において、池波正太郎氏ほどの人物はなかなかいない。だからこそ、今も人気不衰衰することなく読まれ続けるのではないだろうか。

もし、小説を書こうと言う人物がいるのなら、本書を読んで、ぜひ教科書としてもらいたい。純度の高い「小説に必要な要素」を含んだ本書は、きっと多くの知識と教養をもたらしてくれるに違いない。